九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

[030] 文獻探究表紙奥付等

https://hdl.handle.net/2324/10137

出版情報：文獻探究. 30, 1992-09-25. 文献探究の会
バージョン：
権利関係：

既刊号総目録

第一号

資料と私　今井　源衛
藤村の逸文　瓜生　清
近世末期の文献と方言史研究　崎村　弘文
評伝　矢田津世子(一)　花田　俊典
今井源衛教授所蔵フイルム目録(抄)　文献探究編集部
蔵書目その一　露伴翁著書　中野　三敏

第二号

研究室を後に　春日　和男
文庫訪問の心得(一)　今井　源衛
中島広足往来抄(一)　白石　良夫
戯作の唐音かな表記　矢野　準
『日本霊異記』の序・再考　崎村　弘文
評伝　矢田津世子(二)　花田　俊典
蔵書目その二　国字解もの　中野　三敏
書評　近世新畸人伝漫言　森　銑三

第三号

文庫訪問の心得(二)　今井　源衛
「目から鼻へ抜ける」話　吉田　達
見てから読むか…　花田　俊典
日本霊異記下巻序の訓読　秋吉　望
『新撰六帖題和歌』初句索引　田坂　憲二
蔵書目その三　仏法勧化モノ　中野　三敏

資料紹介　古今和歌集聞書　崎村　弘文

第四号

文庫訪問の心得(三)　今井　源衛
中島広足往来抄　白石　良夫
九州大学附属図書館蔵『伊勢物語聞書』について　田坂　憲二
九州大学附属図書館蔵『伊勢物語聞書』について　中條　順子
『とりかへばや物語』四の君密通事件　続攷　辛島　正雄
蔵書目その四　近世木活　中野　三敏

第五号

「大蔵流狂言秘本」のことばの性格　坂口　至
『日葡辞書』の連濁について　木部　暢子
怪異本『宿直座頭』報告　花田富二夫
中島広足往来抄(三)　白石　良夫
評伝　矢田津世子(三)　花田　俊典
九州大学附属図書館蔵『寛文五　乙巳記』　―翻刻と解題―　井上　敏幸
九州大学所蔵『延五秘抄』一本について(一)　崎村　弘文
『金々先生後日夢不物好持たが病』―翻刻と解題―　園田　豊
蔵書目その五　邦人法帖その一　中野　三敏
文庫訪問の心得(四)　今井　源衛

第六号

「べらなり」の和歌　―古今後撰時代の場と表現―　工藤　重矩
九州大学文学部蔵『伊勢物語能愛抄』について　田坂　憲二
中島広足往来抄(四)　白石　良夫

評伝　矢田津世子(四)　花田　俊典
九州大学蔵『延五秘抄』一本について(二)　崎村　弘文
蔵書目その六　邦人法帖その二　中野　三敏
文庫訪問の心得(五)　―カメラの使用について―　今井　源衛

第七号
「詩の青春」　―朔太郎と犀星の交流　萩原朔太郎年譜考(一)　國生　雅子
「くれたけのよなかきをきりて」考
―『大和物語』一四七段補注―　佐藤恵美子
中島広足往来抄(五)　白石　良夫
〈資料〉坂口安吾「意欲的創作文章の形式と方法」
―『定本坂口安吾全集』未収録資料―　花田　俊典
国宝古筆手鑑「大手鑑」「翰墨城」　対照表
「藻塩草」「見ぬ世の友」　田坂　憲二
蔵書目その七　邦人法帖その三　附和刻法帖書論・書学　中野　三敏
文庫訪問の心得(六)　今井　源衛

第八号
助動詞ヨウの成立以前
言語地図の一解釈　―「捨てる」の九州方言―　坂口　至
九州大学所蔵『延五秘抄』一本について(三)　木部　暢子
『風に紅葉』物語覚書(一)　崎村　弘文
中島広足往来抄(六)　辛島　正雄
評伝　矢田津世子(五)　白石　良夫
蔵書目その八　詩学書　花田　俊典
研究室のあれこれの事(一)　中野　三敏
研究室のあれこれの事(一)　今井　源衛

第九号
秋成の一首・成美の一句　―その筆蹟と解説―　市場直次郎
『去来抄』と異本『落柿舎遺稿』　―俳書管見(一)―　大内　初夫
中島広足『倭歌諸説』翻刻　白石　良夫
『風に紅葉』物語覚書(二)　辛島　正雄
宣命の呼称　―続日本紀から三代実録まで―　小野　望
豊前方言アクセント　―二拍2類名詞―　木部　暢子
御伽草子の表記体系(一)　崎村　弘文
研究室のあれこれの事(二)　今井　源衛

第十号
書紀歌謡音仮名と原音声調　高山　倫明
古本説話集の文章　―宇治拾遺物語との比較を通して―　髙橋　敬一
京都大学所蔵『古今和歌集古聞』について　崎村　弘文
浄瑠璃詞章の一考察　坂口　至
活用型の変化から見た上方絵入狂言本
―サ行下二段活用の四段化の場合―　山県　浩
黄表紙に於ける漢字
―黄表紙十一種の使用漢字一覧―　矢野　準
連接する助詞のアクセントについて　木部　暢子
今井源衛先生著『国文学やぶにらみ』に寄せて　辛島　正雄
紹介　今井源衛他編著『古筆手鑑芦屋釜』　辛島　正雄

第十一号

『けふの昔』と『正風俳談録』
―俳書管見(二)・付翻刻『正風俳談録』―　大内　初夫

『風に紅葉』物語の完結性について　―覚書(三)―　辛島　正雄

出発の頃　―萩原朔太郎年譜考(二)―　國生　雅子

九州大学蔵『平語』について　中村　萬里

東京大学所蔵『宗祇假名遣』について　崎村　弘文

虎明の表記意識　坂口　至

活用型の変化から見た上方絵入狂言本
―ラ行下二段活用の四段化の場合―　山県　浩

御尋ねに。　崎村　弘文

第十二号

古辞書と仮名遣い　―近世の節用集の場合―　崎村　弘文

古文書による国語史研究序説　―『豊大閤眞蹟集』について―　安部　美絵

浄瑠璃丸本における表記をめぐって　―平仮名字体について―　野口　義廣

筑後久留米の山崎闇斎学派聞書資料について　望月　正道

書紀歌謡二音節名詞の表記について
―アクセント語類との関連をめぐって―　高山　倫明

蔵書目その九　邦人印譜　その一　中野　三敏

用言の活用形とアクセント　木部　暢子

第十三号

『兵部卿物語』の成立をめぐって　辛島　正雄

『忍音物語』の「尼君」をめぐって　後藤　康文

九州大学萩野文庫蔵『成島信遍集』　―翻刻と解題―　久保田啓一

翻刻『太宰府紀行』　板坂　耀子

アスペクト研究方法試論　木部　暢子

漂流民ゴンザのアクセント(上)　坂口　至

第十四号

中原中也詩における幼児の表象　―「春と赤ン坊」を中心にして―　中原　豊

蒙求抄の二部構造　古田　雅憲

唐船持渡りの書籍と文具　その一　若木　太一

〈新資料〉坂口安吾他・座談会「世相放談」
―『定本坂口安吾全集』未収録資料―　花田　俊典

蔵書目その十　邦人印譜　その二　中野　三敏

沖縄今帰仁方言のアクセント体系　崎村　弘文

漂流民ゴンザのアクセント(下)　坂口　至

第十五号

『呵刈葭』上篇と宗武・宇万伎の「仮字問答」　飯倉　洋一

三つの『三世のなみ』　―成島信遍家集の成立―　久保田啓一

九大本『源氏大鏡』について
―付、『源氏大鏡』三類本本文と校異(序・桐壺)―　田坂　憲二

「好注選」研究一試論
―東寺本中・下巻重出説話七話を手がかりにして―　高橋　敬一

唐船持渡りの書籍と文具　その二　若木　太一

『兵部卿物語』の成立時期をめぐって・補正
—宮田和一郎氏の『兵部卿物語』校注—　辛島　正雄
蔵書目その十一　書画展観目録　中野　三敏
ゴンザのアクセント・私考　崎村　弘文

第十六号
祐徳稲荷神社中川文庫所蔵『如法寺殿道之記』—解題と翻刻—　井上　敏幸
『狭衣物語』作中歌と中世和歌　後藤　康文
漢字専用文献としての前田家本三宝絵詞研究試論　楢田　良照
東海道中膝栗毛の方言描写　小野　望
中島広足往来抄(七)　白石　良夫
『源氏大鏡』三類本本文と校異(二)　帚木—夕顔　田坂　憲二
唐船持渡りの書籍と文具　その三　若木　太一
研究余滴　宇万伎の古道論　飯倉　洋一
ゴンザ『新スラブ・日本語辞典』のアクセント　坂口　至

第十七号
中世擬古物語研究への一視点
—『浅茅が露』『増鏡』所見の類話のことなど—　辛島　正雄
芥川龍之介「青年と死」との一側面　松本　常彦
『月に吠える』刊行前後　—萩原朔太郎年譜考(三)—　國生　雅子
日中両国における指示詞の研究
—〈コ・ソ〉系と〈這・那〉系の対照をを中心として—　張　瓊玲
『源氏大鏡』三類本　本文と校異(三)若紫—花宴　田坂　憲二
唐船持渡りの書籍と文具　その四　若木　太一
細井広沢の竹枝　宮崎　修多
ゴンザのアクセント・私考　続　崎村　弘文

第十八号
壱岐のアクセント　添田建治郎
紀海音の用語意識　—韻律の観点から—　坂口　至
「シウ」・「シユ」・「シユウ」　江口　泰生
元禄期における字音M尾N尾の発見　—中村惕斎の「韻学私言」—　岡島　昭浩
中国語動詞の分類試論　張　瓊玲
式亭三馬の趣向　大内　保宏
「袈裟と盛遠」論　—人物造型への一考察—　下野　孝文
太宰治と自意識の時代　—「ドストエフスキイ論」をめぐって—　山崎　正純
連声小考　崎村　弘文
〈コラム〉寸懐(I)
前号補訂、地獄極楽竹枝、および竹内雲濤の詩話のことなど　宮崎　修多

第十九号
『東洋客遊略』の音訳漢字表記について　高山　倫明
紀海音の用語意識　—韻律の観点から—(下)　坂口　至
小林秀雄論ノート(1)—ヴァレリー的知性の呪縛—　山崎　正純
唐船持渡りの書類と文具　その五　若木　太一
韓国語動詞分類試論　蔡　京希
　　權　奇沫

韻律論のために　崎村　弘文
〈研究余滴〉佐賀方言の「動作進行態」と「状態継続態」　江口　泰生

第二十号
中世物語史私注　―『木幡の時雨』『源氏小鏡』をめぐって―　辛島　正雄
小林秀雄論ノート(2)　―文芸の科学性について―　山崎　正純
東国文献としての「天正狂言本」　―動詞の音便形について―　江口　泰生
元禄期の字音仮名遣いの一例
―中根元圭序『筌蹄集』のワ行仮名と唇内韻尾―　岡島　昭浩
『物類称呼』の地名表示について　小野　望
延岡市島野浦島の二拍名詞アクセント　坂口　至
研究余滴　宇都宮土龍と『延年集』　高橋　昌彦
薩摩藩の有職学　―玉里文庫研究―　崎村　弘文
『徒然草』の漢語とその訓み(一)―細川幸隆本を資料として―　高橋　敬一
蔵書目その十二　邦人詩文集　總集　その一　中野　三敏
川路柳虹参考文献目録稿　中原　豊

第二十一号
「鼻」論―「羅生門」を媒介として―　下野　孝文
瀧亭鯉丈の文学　大内　保宏
〈研究余滴〉夏目漱石作品中における「まだ～ない」について　赤峯　裕子
「思ひ出」一章(下)　―太宰治私注・稿―　花田　俊典
『蜻蛉日記』注釈余滴(一)　今西祐一郎
資料　山之口獏―新資料および初出本文紹介―　松下　博文
蔵書目その十三　邦人詩文集總集その二　中野　三敏
〈研究余滴〉撥音・促音・長音のモーラ化の時期について　坂口　至
鹿児島方言外来語彙のアクセント　崎村　弘文
方言使用に対する規範意識の実態・続攷
―回答者との属性との関連性―　山県　浩
九州北部の可能表現　木部暢子ほか

第二十二号
都市を描く　板坂　耀子
『蜻蛉日記』注釈余滴(二)　今西祐一郎
『狭衣物語』作中歌の背景(一)　後藤　康文
《前号補訂》蔵書目その十三　邦人詩文集總集　中野　三敏
「思ひ出」二章　―太宰治私注・稿―　花田　俊典
資料　山之口獏　―「自分のこと・淵上のこと」―　松下　博文

第二十三号
『大和物語』の「けむ」をめぐって　伊佐山潤子
古狂言本の待遇表現形式「オ～ヤル」と「～ヤル」　坂口　至
形態音韻論的観点からみた一八世紀初頭の薩隅方言
―助詞「の」の撥音化について―　江口　泰生
〈翻刻〉『伊勢物語当流私』(一)　坂本　信道
『狭衣物語』作中歌の背景(二)　後藤　康文

補訂版『萩原朔太郎全集』「年譜」絵緒見て
―萩原朔太郎年譜考・補遺　國生　雅子
「思ひ出」三章　―太宰治私注・稿―　花田　俊典
資料　山之口獏　―「風変わりな人達の『話』の会」―　松下　博文
大分方言文献目録(1)　二階堂　整
アクセントの起源をめぐる小考　―または韻律論のために・続―　崎村　弘文
漢字安定語の追究　―習得期の動向を中心に―　坂本　浩一

第二十四号
「魚服記」の構造　―遡行と根源を巡って―　郭　斐映
壇一雄の福岡高校時代　長野　秀樹
資料　山之口獏　―「むらさき」への投稿作品　松下　博文
＜翻刻＞『伊勢物語当流私』(二)　坂本　信道
『狭衣物語』作中歌の背景(三)　後藤　康文
＜翻刻＞『翻譯満語纂編』抄　その一　赤峯　裕子
大分方言文献目録(2)　二階堂　整

第二十五号
唐音語存疑　岡島　昭浩
大きな森の家　―壇一雄の久留米時代(一)―　長野　秀樹
資料　山之口獏　―「文藝」への投稿作品―　松下　博文
近世紀行文紹介　その二　板坂　耀子
＜翻刻＞『伊勢物語当流私』(三)　坂本　信道
『狭衣物語』作中歌の背景(四)　後藤　康文
大分県方言文献目録(3)　二階堂　整

第二十六号
静子の登場
―『リツ子・その愛』『リツ子・その死』論　長野　秀樹
資料　山之口獏
―「行動」「四季」「批評」「人民文庫」「詩原」への投稿作品―　松下　博文
近世紀行文紹介(その四)　板坂　耀子
栗生の方言(一)あ之部～こ之部　山崎時造著　崎村弘文監修
＜翻刻＞『翻譯満語纂編』抄　その二　赤峯　裕子

第二十七号
ハ行子音の音価と表記　―朝鮮資料『捷解新語』を中心に―　奥村　和子
大江匡衡　粟田障子十五連作　木戸　裕子
資料　山之口獏
―火野葦平作「戯曲　ちぎられた縄」パンフレット掲載作品―　松下　博文
栗生の方言(二)さ之部～と之部　山崎時造著　崎村弘文監修

第二十八号
研究ノート『こゝろ』のいわゆる「御嬢さん策略家説」再考　伊佐山潤子
身のうさは人しも告じ　―「浅茅が宿」作中歌補注―　飯倉　洋一
＜翻刻＞九州大学音無文庫蔵『知顕集』(一)　藤島　綾
翻刻　『諏訪霊験記』　岩松　博史
栗生の方言(三)な之部～ん之部　山崎時造著　崎村弘文監修

〈翻刻〉『翻譯満語纂編』抄　その三　赤峯　裕子

第二十九号
〈翻刻〉『拾遺和歌集紀聞』　福田　智子
〈翻刻〉『熊野の本地』　岩松　博史
大江匡衡　粟田障子十五連作　木戸　裕子
〈翻刻〉九州大学音無文庫蔵『知顕集』(二)　藤島　綾
資料　山之口獏　―「列島」への投稿作品―　松下　博文
『栗生の方言』を読む　崎村　弘文

第三十号
研究ノート『それから』の「ヴルキイル」　伊佐山潤子
〈翻刻〉『滑稽和合人』　五編・六編(一)　大内　保宏
資料　山之口貘　―「日本学芸新聞」への投稿作品―　松下　博文
『稿本大阪訪碑録』撰者・書者・篆者　人名索引　高橋　昌彦

※　第十・十一・十二・十三・十四・十五・十七・十八・十九・二十・二十一・二十二・二十五・二十六・二十七・二十八・二十九号につきましては在庫がございます。必要な方は御一報下さい。

編集後記

○「文献探究」第三十号をお送りいたします。
○今回、第三十号ということで《既刊号総目録》を載せました。
○次号は来春三月刊行予定です。

（京・中村記）